

週刊 タバコの正体

喫煙者のタバコの煙を吸わされる受動喫煙は、かなり危険だという事をすでに紹介しましたね。喫煙者本人が吸い込む主流煙より、火が付いている先端から出る副流煙の方が有害物質の濃度が高くなるので、知らないうちに吸わされてしまった人は健康被害を受けているはず。しかし、その程度は小さいので目に見えた形ですぐには現れません。毎日何本も吸い続ける喫煙者でさえ、タバコのせいで病気になるまで30年以上かかるのですから、受動喫煙による健康被害はさらに見えにくいでしょう。

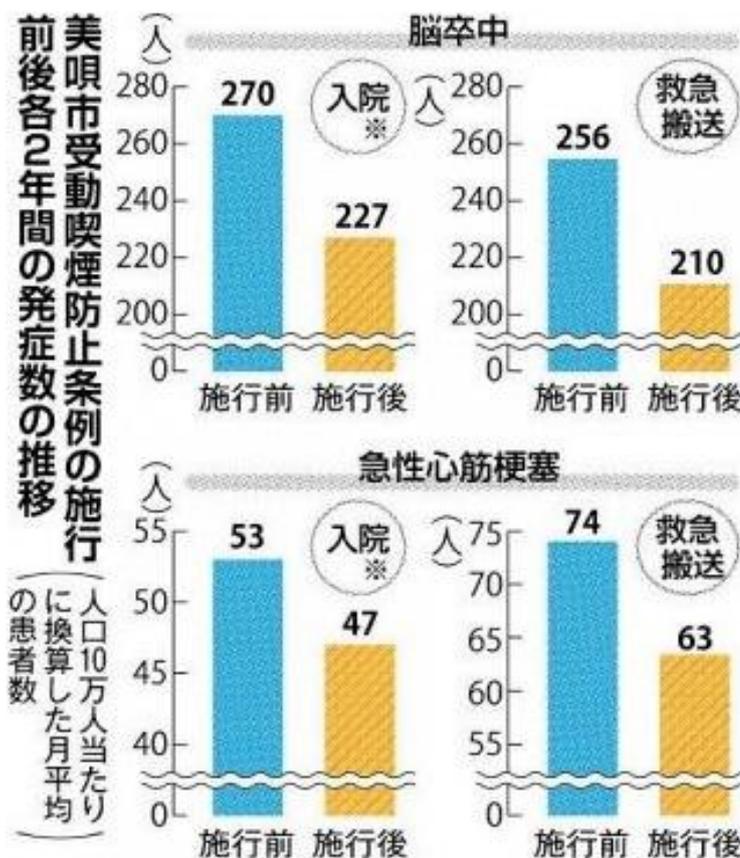
ところが、意外なところで受動喫煙と健康被害の関係が明らかになったケースがあります。北海道の中部に位置する人口約23000人の美唄市では、4年前の2016年7月に受動喫煙防止条例が施行されました。下に示すように、学校、公園などに隣接する道路や自動車内、歩行中、自転車走行中の喫煙も禁止するという内容が含まれる独自の条例でした。

北海道美唄市の受動喫煙対策

- 学校、公園、児童福祉施設の敷地から100^{びばい}以内の路上
- 妊婦や子どもが同乗する自動車内
- 屋外の公共の場所での歩行中・自転車走行中

▶ 努力義務だけど喫煙×

朝日新聞 DIGITAL から



北海道新聞から

そこで、この条例の施行前後での市民の健康状況の変化を調査した結果を紹介します。左下のグラフを見てください。条例の施行前後で、脳卒中と急性心筋梗塞の発症数が明らかに変化したそうです。

例えば、脳卒中は人口10万人あたりに換算すると施行前は毎月270人も入院していたのに、施行後は227人に、救急車で運ばれた人も256人から210人にまで減っています。前後各2年、合計4年間の調査結果ですから受動喫煙が健康被害を与えている確かな証拠だと思います。

他人のタバコに“クサイ”とか“煙たい”と感じても、その場だけ一時の事だと軽く考えがちですが、こんな事実を知ると「受動喫煙には、きちんと気を使わないといけないな」と思いますよね。

産業デザイン科 奥田 恭久